名迴東古墳(児塚)

(緊急発掘調査概報)

1970

長野県伊那市教育委員会

序

名廻東古墳は、長野県伊那市西春近白沢部落にあり、権現山山麓より発達した山麓扇状地に位置していて山麓に清水が湧きでており、天竜川にそそぐ犬田切川を望み、東に南アルプス、西に中央アルプスの連山を仰ぐ景勝の地であります。

この度市道拡幅工事に当つて古墳を緊急発掘調査して記録保存をすることになりました。調査は、昭和４４年４月５日の予備調査に始まり、４４年４月１２日、１３日の２日間にわたつて本調査が実施されました。

本調査にあたつて土地所有者唐木米吉氏と県文化財専門委員向山雅重先生及び上伊那考古学会の諸先生と地元文化財審議委員辰野伝衛氏に深甚なる感謝を表す次第であります。

なお、この概報が今後の調査に多少なりとも役立てば幸です。

昭和４５年３月

伊那市教育委員会
教育長　小　林　重　男

目　　次

序

図版目次

第1章　環　　境 …… 1

第1節　位　　置 …… 1

第2節　地形・地質 …… 1

第3節　歴史的環境 …… 1

第2章　発掘調査の経過 …… 2

第1節　発掘調査に至るまで …… 2

第2節　調査日誌 …… 2

第3章　墳丘と内部構造 …… 3

第1節　墳　　丘 …… 3

第2節　石　　室 …… 3

第3節　遺　　物 …… 3

図　版　目　次

版 1　伊那市名廻東古墳遠望
2　西方より見た名廻東古墳
3　白沢林道と名廻東古墳
4　塚の北側が道路によつて分断された
5　白沢林道に依つて法面が崩れ落ち羨道入口が露出した
6　調査前の羨道入口の状態
7　林道拡張工事の個所のみの葺石出土状態
8　羨道入口東側の葺石の状態
9　羨道と玄室の境と床面張石
10　羨道の東壁
11　羨道全景
12　羨道床面
13　羨道入口
14　羨道入口西側の積石
15　羨道の西方より見た状態
16　羨道の奥壁と玄室の境に深く埋められた石
17　羨道の石積表面に発見された須恵器
18　羨道の覆土中より発見された須恵器
19　羨道覆土中より発見された須恵器
20　羨道覆土中より発見された須恵器
21　須　恵　器
22　須　恵　器
23　自然釉の出た須恵器
24　土　師　器

第１章　環　　境

第１節　位　　置

飯田線沢渡駅より西方1.8km、犬田切川左岸段丘、標高７４０mに位置し、白沢部落に含まれている。

第２節　地形・地質

古墳の西方には、木曾山脈、権現山（１７４８.３m、地元の権現信仰の山として親しまれた霊山が聳え立ち）それより源を発した犬田切川は、山麓の白沢部落の西で水平距離２８.２０m、垂直距離９４３.３m、傾斜角度２０度の平均勾配で流下する氾濫規模の大きい河川である。近年、この氾濫を防止するため砂防ダムを数個所に建設し、土砂の流出を防いでいる。山麓より天竜川河成段丘迄の距離は1.６３０m、高底差１４０m、平均勾配６度の傾斜をなし、主に左右両岸は桑園、及び畑地に利用され、養蚕地帯として名をなしている。

権現山の北側は、領家変成岩類の片状ホルンヘルスⅠと、南側は片状ホルンヘルスⅡが大方の地質構造をなすが、その間に、一部領家花崗岩類の太田切花崗岩の細粒両雲母花崗岩が縞状に入つている。また、伊那礫層との境に崖錐堆積物が見受けられ、断層の痕跡をとどめている。犬田切の河床には、片状ホルンヘルスⅠ、Ⅱの黒味の石と、太田切花崗岩の白い石とが混在していて、見る人の目を楽しませてくれる。木裏原一帯は伊那礫層上に火山灰土のローム層が覆つている。

第３節　歴史的環境

犬田切川左岸上には、一番下流に（天竜川河成段丘に接し）、唐木古墳（現在は墓地になつているが横穴式石室の一部が残る）が存在している。遺物の確認はしていないが、後期古墳と考えられる。

白沢古墳は、東西二カ所の古墳がある。東を鎮護塚といい、西の塚を西塚と呼んでいる。鎮護塚は直径１２.６m、高さ2.５５mの横穴式石室を持つ円墳、西塚は異円形式墳、直径は１３.６m、高さ1.８m、両古墳共学術発掘でないので記録をとどめない。

鎮護塚は床に石塊を敷きつめてあるが、西塚は粘土を敷てあつたという。遺物は鎮護塚では、直刀、鉄鏃、勾玉、管玉、　玉、小玉等２６個が一個所に集つて発見された。

室の中央奥寄りに轡、刀子、剣があつたという。西塚では、直刀が入口附近、西壁に添て、鏃は東壁に接し、土器４個は入口にならべてあつたという。いずれも後期古墳である。名廻西古墳は児塚古墳の西１００m、唐木米吉氏住宅の北段丘上にある。古く白沢部落に犬田切川から引水した時に破壊されたもので、それを今回の道路拡張工事のため更に破壊され石室の一番奥の石がわずかに残る程度でである。今回の児塚古墳発掘時迄だれも知らなかつた古墳である。以上犬田切川左岸に築造された古墳は、唐木、白沢鎮護塚、西塚、児塚、名廻西塚の五古墳を数え、この古墳群はいずれも後期古墳である。伊那谷の古墳の立地は、平坦地には少く、その大方は河成段丘上に位置している。このことは信仰上と何らの関係を有するのかも知れない。この外名廻部落よりは縄文中期、土師器、須恵器、灰釉等多くの遺物が表採されている。

（友野　良一）

第２章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまで

発掘前の遺跡の現況は中央高速道路の開通が決定されたので、長野県教育委員会は、ルート内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査を行つた。この調査の折には本古墳は注目されなかつた。その後、所有者唐木米吉氏が藪掃除をしたところ、直径１４ｍ、高さ２ｍ余の小高い墳丘があるのに気付いた。その後、白沢の辰野伝衛氏実地踏査したところ、これは古墳ではないかと言う疑問をもち、伊那市教育委員会に通達し調査したところ、古墳に相違ないことが明らかになつた。この時、本古墳の南を通つている市道の拡幅予定があり、市としては早急に工事を行う必要が生じていたので、県教育委員会の指示のもとに昭和４４年４月１２日～１３日の両日調査を行なつた。

第２節　調査日誌

４月５日　予備調査、友野良一、山田とし、この日は小雪のパラつく寒い日であつた。古墳の一部切り開かれた南側道路方面に細長い自然石が数個かたまつて松の切株の間に見られた。これが羨道の一部ではないかと想像される。墳丘全面美しく山掃除をされたあとは、古墳らしく見える。古墳の南側は道路で一部切り取られた形、西側及び東側は犬田切川の河成段丘に連なる丘、北側は白沢に通ずる道路によつて開鑿されこれも墳丘の一部が崩されている形である。古墳の大きさは、直径１４ｍ、高さ平均２ｍ、周溝を有する円墳である。今回の調査は市道の拡幅部分のみに止める限定された調査である。従つて発掘というより、墳丘の状態を調べるといつた方が適当かと思われる。

４月１２日　５日の予備調査に依つて知り得た事項を基として、調査を開始した。市教育委員会課長補佐、保坂九市、地元辰野伝衛氏、酒井英夫外７名、友野良一、山田とし、根津清志、市道拡張の幅杭に対して東西に縄を張り、調査区域の設定を行う。古墳の現況は、南側は拡張前の道路方面に羨道の石が露出している状態、それより北側に２ｍが今回の道路の幅で切り取られる個所である。先、墳丘の実測は山田としが担当、それと併行して、調査される個所の表土を削る作業、前面は羨道の一部であることを確認することが出来たので、そこから計測してみると、石室は北側に有することが明らかとなる。今回は、石室の調査は行はない予定であるので、羨道の調査に全力を注ぐことにした。羨道の前面は破壊されていることは前述の如く最初から判明していたのであるが、羨道内部においては、表土を削る前述で不明であつたが、調査が進むにつれ、或る時期に盗掘が行なわれた事実が明らかになつて来た。羨道の天井石はだいぶ動いていた。内部も盗掘した跡がうかがわれた然し羨道左右の石積は一部動いていたが、その他は動いていない。覆土を２５cm内外除いたところ、羨道の落ち込み部分より須恵器が発見される。水甕の胴部破片、それから僅かに下に提瓶の破片を発見、またその北寄りに水甕の口縁部を検出、また土師器（内黒の皿）も発見される。続いて落ち込み土中より硯の一部を発見する。天井石を除去し落ち込みの黒土層を除土すると、羨道の床面が検出する。床面には自然石を平に敷きつめている。床面上からは遺物は何物をも発見されなかつた。本日は、羨道の内部と墳丘の表面調査で終る。

４月１３日　前日に引続いて調査、葺石の清掃及び羨道内部の清掃と、写真撮影及び実測。参加人員は、前日のメンバー。午後５時終了。本日は、伊那市教育長小林重男、向山雅重、御子柴泰正、報道関係、信濃毎日新聞、中部日本新聞、地元の見学者多数。

（友野　良一）

第３章　墳丘と内部構造

第１節　墳　　丘

犬田切川左岸段丘上に築造された古墳である。犬田切川は、概して急流の河川で、犬田切川に併行した段丘も概して傾斜は急である。本古墳附近の傾斜は東に平均６度の勾配をなしている。現在の犬田切川は南寄りであるが、古くは古墳近くを流れたことがある。その古い段丘上に営まれた古墳である。調査前の規模は東西１２.２ｍ、南と北はいずれも道路で切り取つて原形をとどめないが現在の計測では９ｍである。比高は西側で７０cm、東側で1.７ｍ、その差１ｍ、平面形は円形状を呈する墳丘である。

中心部墳上には天井石など一部が露出しているので墳頂はもつと高かつたものと思われる。外部施設としては葺石が認められ、その葺石も部分的に欠損している模様である。

第２節　石　　室

羨道部の長さ2.４ｍ、幅入口で８０cm、奥で１ｍ、高さは入口で９０cm、奥で９１cm、床は自然石を敷つめ、側壁は控の長い面２４～２８cm、控３０～７０cm大の自然石を組み合せて作られたもの。天井石はだいぶ移動していた。閉塞部には径４０cm、長さ９０cm大の自然石が床面に掘り込まれて構築されたかつこうである。それから奥にも斜目の石が検出されたが、天井石などで動かすことが不可能で、調査を打ち切つた。玄室はこの奥に存在することは確実となつた。

第３節　遺　　物

封土内及び羨道内から発見されたもの

甕２、提瓶１、碗１、須恵器脚付杯１、須恵器杯２、土師器（内黒）等で、全て後期古墳の遺物である。

（友野　良一）